

アジアの友

The Asia-no Tomo

2-3

FEBRUARY-MARCH

2015

Special Interview

セレンディピティーに満ちた人生
ウィワット タンタパニチャクン 教授





2014 年度最後の花金会が開催

2月6日（金）夜、アジア文化会館（ABK）のフロア学生と職員の交流会である花金会が開催されました。今回は2014年度最後の会で送別会を兼ねて開催。4名の学生が卒業し退館、就職や帰国など新たな道を歩み始めます。去っていく学生の中には10年近くABKで生活をした学生もあり感慨一入ですが、みなさんとABKとのつながりは変わらずに、新しい舞台で輝いてもらえればと期待しています。ご卒業、おめでとうございます！

※ フロア学生：ABKの特別枠入館寮生



アジアの友

2015年2・3月号 第513号

目 次

	Special Interview
2	「セレンディピティーに満ちた人生」 ウィワット タンタパニチャクン教授
	インタビュー
13	「私の日本留学と提言」 劉 耀 強 ～マレーシア
	寄 稿
20	改変成真（まことへかえよう） 劉 彩品
	コラム
22	泰日工業大学 奮闘記（第10回） 「思い出は教室の外で」 安武光
	私の意見私の体験
24	「日本語の楽しさを全ての若者に！」 蔣 孝佩 ～台湾
	知友会通信
27	奨学金・イベント情報
	MEMBERS
30	ご入会、ご寄付のご報告（2014年12月、2015年1月）

<表紙作品> 「憧れの存在」 by 蔣 孝佩

Special Interview**セレンディピティーに満ちた人生****ウィワット・タンタパニチャクン 教授**Professor **Wiwut Tanthapanichakoon**

国立大学法人 東京工業大学 大学院理工学研究科 化学工学専攻

4年前、東京工業大学（以下、東工大）の教授としてタイから赴任されたウィワット・タンタパニチャクン氏は東工大で初めてのタイ人の終身正規教授です。しかし早いものでこの3月には停年で、退官され帰国されます。先生は、1968年文部省奨学金で日本留学し、1年間日本語を学んだ後京都大学（以下、京大）に進み化学工学を専攻されました。その後大学院は京大と交流のあったアメリカのテキサス大学オースティンに進み PhD を取得され、帰国後はタイ国立チュラロンコーン大学（以下、チュラ大）で長年学生の教育と研究に携わってきました。一方、帰国後すぐに泰日経済技術振興協会（TPA）で日本からの技術移転とタイの産業人材育成に携

わり、専門書の翻訳、セミナーの通訳、講義等行い TPA の発展にも尽力し、その後会長に就任しています。更に、タイの研究開発機関であるタイ国立ナノテクノロ



ジー研究センター（NANOTEC：National Nanotechnology Center）の初代センター長に就任され新技術研究開発を牽引されてきました。

タイを代表する教育者、研究者としてのこれまでの道のりについて、また、転換期にある日本の大学での経験を通して、少子化、グローバル化の中で変わりつつある日本の大学についてグローバルな視点からのご意見を伺いました。

まず、先生は、これまでの人生はセレンディピティー (Serendipity; 予期せぬ何か良いものを発見する幸運) に満ちた人生だと振り返られています。お話を伺ってみると確かに先生は人生の要所、要所でセレンディピティーを掴み取り、努力、前進され、今日に至っています。

Dr. Wiwut's Serendipity

(1968 ~ 2014)

- 日本留学
- 専攻分野の切替 (電気→化学工学)
- 京都大学入学
- アメリカの大学院へ留学
- 日本の研究助成金等 (旭硝子財団及び日本学術振興会他)
- NANOTEC の初代センター長就任
- SCG 化学社へ
- 東京工業大学の終身教授に

セレンディピティーは、科学の分野においても大変重要な役割をもたらしてきました。ノーベル賞受賞者の多くの研究者が、セレンディピティー (Serendipity ; 偶然の幸運な発見) に出会い、数々の世界的な発明、発見が行われてきました。

ウィワット先生は、2003 年秋に日本で開催された 1st Nanotech Conference & Exhibition に主要国からパネリストとして招待された 3 名のナノテクの専門家の一人として『Messages to The Young Generation from Top Researchers』というテーマで話されています。そこでは、ナノテクノロジー分野の若い科学者・研究者へのアドバイスの中でトップクラスの科学者に成長してゆく上での必須要素として次のことを上げています。

- ・Passion (情熱) / ・Curiosity (好奇心・探究心) / ・Analogy (類似性・類推) /
- ・Serendipity (偶然の発見)

それでは、先生の歩まれてきた道のりについてお伺いしてゆきます。

■ 専門について

私の専門分野は化学工学ですが、広く化学工学 (熱・物質、移動・転換)、石油化学工学、粉体工学、ナノ粒子技術、プロセスモデル化及び工程シュミレーション、エアロゾル工学、エネルギー工学を大学では研究し、教えてきました。

■ 予期せぬ日本への留学

私は高校時代には、日本に来ることはまったく考えておらず、日本政府の奨学金 (文部省奨学金) の制度も知りませんでした。当時タイで有名だったのはオーストラリアのコロンボ・プランの奨学金でした。うち

は特別裕福な家庭ではなかったので、もし留学するのなら奨学金は絶対条件ということで、高校時代は一生懸命英語の勉強をしてこれを狙っていました。

しかしクラスの友人から「日本の文部省奨学金に応募する」という話を聞いて、初めて日本政府の奨学金のことを知り、それなら自分も応募してみようと思ったんです。それが試験の1週間くらい前の話ですから、ほとんど何も準備をしないで受けに行ったということになります。

結果は学部生10人合格のところ、私は13番目で補欠の最後でした(笑)。しかし、たまたま3人キャンセルが出て、日本に来られることになったんです。これが最初のセレンディピティ(serendipity)ですね。

当時、日本は留学先としてはあまり人気がありませんでした。留学はやはり欧米でした。しかし、タイの大学の入学試験やコロボ・プランより早く文部省奨学金試験は行っていました。また、合格後もすぐに決断しないと失格になるという感じだったんです。

そこで、私が日本留学を決意したのは、日本は敗戦後の経済成長が非常に順調にいていたのでその秘密を知りたかったということ、さらに欧米に行くと宗教も違うし、文化も異なるので対応できるかどうかという不安もあり、日本だったら仏教国で考え方も似ているだろうと思ったからです。

ました。なぜかというと、周りから日本にはソニーやナショナルなどの有名電気メーカーがいろいろあって、電気・電子はレベルが高いけど、他の分野はどうかなという話を聞いていたからです。だから当時は工学部に入る留学生のほとんどは電気が機械を専攻していました。

ところが来日後東京大学(以下、東大)で工業化学を学ぶタイの先輩から化学工学という分野があるという話を聞いて気持ちが変わりました。化学工学は物理や数学など広い分野について学べます。さらに石油化学とか重化学といった学問はタイの工業化のために非常に重要であるにも係わらず、まだタイにはないという話を聞いて、決断し、専攻を変更したわけです。ですから私はタイ人として学部の化学工学を専攻した一人目なんです。京大でもこの分野に入学した2人目の外国人留学生でした。

また、京大に行ったのもある種の偶然ですね。やはりみんな東大がナンバーワンだと言っていますから、東大に行くべきかどうかということで多少悩んでいた部分はありました。ただ私は東京のような大都会は好きではなく、もともと京都の方が好きだった。それに加え、ちょうど学生運動で東大の入試がない年にあたり、同期生を誘って一緒に京大に入ることにしたんです。昔は京大に行く留学生はものすごく少なかったと思います。

■ 京大で化学工学を専攻

元々私は大学では電気工学を志望してい

■ 学部卒業後、大学院はアメリカに留学

私は日本語の勉強1年、大学の学部で4

年と日本に5年間いて、日本の文化や教育の仕方等もかなり理解していたと思います。そして、大学院もそのまま京大で進学する予定でした。ところが、アメリカにリサーチアシスタント（RA）として行くチャンスが突然出てきたんです。

そのきっかけも偶然でした。私が大学の教職員と留学生との交流会に参加したとき、そこで化学工学科の吉田文武先生から「君はこれからどうしますか？」「タイでは日本の大学の評価はどうですか？」といった質問をされたんです。私は正直にタイでの日本の大学の評価を説明しました。そうしたら先生から「もしアメリカに行きたかったら紹介してあげますよ。」というお話が出たんですね。「どこに行けますか？」と聞いたら、「テキサス大学に毎年日本人学生を紹介しているが、去年は誰も行かなくて、今年も現地の日本人の先輩から京大から誰か来ないかと聞かれている。」ということでした。「だから興味があったら紹介しますよ。」と。

今でもですが、アメリカは経済的にも軍事的にも世界のナンバーワンで、私の専門である化学工学分野においてもそれは同じでした。だからアメリカで化学工学が勉強できるというのは、私にとっては学問的には最高のことでした。だから奨学金があれば行きたいと言ったところ先生は紹介状を書いてくれました。私は成績もクラスのトップに近いところにいましたし、TOEFLでも99%以上の点数がとれたので、RAとしてアメリカに行けることになったわけです。ただ、私はトップの成績で京大大学院の試

験に合格していましたので、指導教授からはもちろん引き止められました（笑）。

当時のRAの給料は250ドルでしたが、授業料は自分持ちでしたのでアメリカではギリギリの生活をしていました。私は修士、博士と5年間アメリカにいましたが、自炊しないと生活は厳しい状況でした。しかしそれでもやっぱり行って良かったと思っています。

■ アメリカ留学を経験して

一番良かったのは、現地でアメリカ人と競争してみて、自分も勝てるんだということを感じられたということ。それまで感じていたコンプレックスがなくなったということですね。

それにアメリカに行くと英語力、特にヒアリング力が非常に良くなります。また、やはりタイではアメリカの大学の評判は日本の大学より一般的には高いですから、帰国後の評価も違います。それに、海外に行くこと自体ものすごく難しかった時代にアメリカの西海岸から東海岸、カナダ東部を貧乏旅行する機会も得られました。それは非常に貴重な経験でした。

一方、残念だったのは、アメリカのクラスメートや先生との関係で、日本と異なりそれほど親しくなれなかったということです。おそらくあちらでは学部生時代に親しい友達を作っているということもあるのでしょうか。大学院生はある程度大人ですし、既にグループも出来上がっていて、あまり親しくなれませんでした。アメリカ人の先

生の学生に対するカルチャーも日本のそれとは違いました。

昔の日本の先生は家族みたいで、学生を家に呼んだり、就職の世話も先生が必ずしてくれました。中にはお見合いまでしてくれる先生もいましたね（笑）。やはり日本は講座制なので、同じ講座、研究室の中は非常に親しい。アメリカは講座制ではないので、それぞれが独りで勉強しなければなりません。教授でも助教授でもそうです。もちろん共同研究といったことはしていますが、日本のような制度にはなっていないということです。

もう一つ、アメリカはタイから大変遠いです。だから帰国後、共同研究などの協力がしにくい。特に昔はアメリカまで行くお金も時間も今よりかかったので簡単ではありません。そういう部分では日本のほうが近く、先生もよく気を使ってくださり良かったです。

■ タイ帰国後、チュラ大の教員に

私が日本に来たのは日本の大学紛争が盛んな時期でした。そのことも私にいろいろと考えるきっかけをつくってくれました。どうして学生がデモやストライキをするのか等々。

その結論は日本の義務教育がしっかりしていたからだということでした。戦後日本が素晴らしい復興を遂げたのも教育のおかげだと。つまりタイを発展させるためにはタイの教育が非常に大事だという結論に至り、それで私は迷わず帰国後チュラ大の教

員になりました。タイの公務員の給料は、民間企業の1/3～1/4とものすごく低かったので留学して公務員になる人は少なく、日本政府の奨学生の先輩でも公務員になった人はほとんどいなかったと思います。しかし、日本でこの学生運動を目の当たりにした私たちの年の奨学生は、10人中6人が大学の先生になっています。

■ 当時のタイ人にとっての日本留学

京大に入ってから半年ほどは大学が占拠されるなどで授業がなく、暇なので本を読んだり、仲間と話しあったりといろいろ考えました。ベトナム戦争のこともタイにいとアメリカの情報しか得られません。アメリカは空軍基地をタイに置いてベトナムを爆撃していたわけですが、日本に来るといろいろと正しい情報が得られ、また別の面からこの戦争が見えて、私たちも驚くことが多く、それはいろいろな刺激を受けました。タイにずっといたら、そういう発想や考えには至らなかっただろうということがいくつもありました。

一方で当時の日本留学のデメリットですが、当時日本の大学は一部のタイ政府から認定されている大学を除いてほとんど知られていなかったということです。また、認定されている大学でも、日本の卒業生は欧米の卒業生に比べて社会の評価は低かったんです。ですから私たちは先輩が日本留学生の実力を証明するために始めた泰日経済技術振興協会〔TPA: Technology Promotion Association (Thailand-Japan)〕の事業に帰

国後積極的に参加し、今日の TPA を作り上げてきました。そしてタイの社会に貢献しながら自分たちの実力を発揮してきたわけです。

■ 泰日経済技術振興センター (TPA)

私は 1978 年にチュラ大に入職後、すぐに TPA (1974 年 1 月創設) と係わるようになりました。先にも話しましたが、TPA は日本からタイへの技術移転及びタイの産業人材の育成に大きな役割を果たただけでなく、私たち日本留学生の実力を証明するのに非常に大きな役割を果たしました。そして、TPA は設立当初からの夢であった大学の設立を 2007 年に実現しました。泰日工業大学 (TNI : Thai-Nichi Institute of Technology) の創設です。既に TNI はタイ社会に二千人以上の学部卒業生を送り出し、順調にその運営を行っています。

TPA の日本の専門書のタイ語への翻訳・出版はとても社会的に大きな意味を持ち、各方面に多大な影響を与えてきました。数多くの翻訳に携わることができたこと自体、自分にとってはよい勉強になりました。また日本から数多くの様々な分野の専門家の方に来てもらいセミナーを開催してきましたが、私自身多くのことを彼らから教わることができました。もちろん TPA のすべての事業はタイの工業化、発展へ多大な貢献をしてきました。

この TPA 事業は今後もずっと継続すべきですし、今後は泰日工業大学 (TNI) と



泰日経済技術振興センター (TPA)

どのように連携していくかということも重要な鍵となると思っています。

■ タイ国立ナノテックセンターの初代所長に

これはもう一つのセレンディピティですね。

始まりはアメリカのテキサス大学留学当時、金沢大学の金岡先生と同じ研究室で知り会ったことです。金岡先生はエアロゾル工学が専門だったのですが、これが縁でタイに戻ってから金沢大学に誘われ、日本学術振興会の制度を利用して金沢大に短期研究に行くことになったんです。私は日本側が行う実験結果を検証し、解析し、シュミレーションをし、かなり良いモデルを作り上げることができたんです。こうした過程の中で、日本のエアロゾル工学や粉体工学の先生方の知り合いが増えました。その中の横浜国立大学の松本幹治先生が粉体工学会の東京談話会の幹事で、そのメンバーをタイに連れて行きたいと言うので、せっかくタイに来るのなら TPA で日泰共同セ



た。しかしその上にいた井伊谷鋼一先生はAPPIEおよびSPTJの元会長で非常に強い影響力を持っていました。その井伊谷先生は京大の化学工学科の教授で、「ウィワットがタイでそういうことをやるのなら、東京談話会でわなく、APPIE自体が応援しよう」と言ってくれたんです。それでタイ粉体工学センターは成功し

セミナーをやりましょうということになり、TPAで無料の粉体工学関係のセミナーをしていただいたんです。

このセミナーには100人以上の参加者があり、予想以上にタイで粉体技術への関心が高いということがわかりました。それで松本先生から「君もタイで粉体工学に貢献しないか」というお話しをもらったんです。もちろんチュラ大で教えるのは問題ないが、せっかくやるのならタイ粉体工学センター(TPTC)をつくり、企業をメンバーにしてサービスをしたい。しかしそうしたお金がないと先生に相談したら、先生は日本の企業から中古の機材を募ってこれを提供してくれました。さらに日本粉体工業技術協会(APPIE)や粉体工学会(SPTJ)に呼びかけてくれて、センターの運営経費まで無償でいただけることになったんです。

そして、それが成功したのも幸運がありました。当時松本先生は助教授で、まだ協会での役割はそれほど高くありませんでし

たんですね。

ベトナムやマレーシア、モンゴルにも同様なセンターを創りたいという話があったのですが、うまくいかなかったようです。やはり人がいるからいろんなつながりができて、大きなことも可能になるわけです。

その後、2000年に当時のクリントン大統領の「日本に負けるな」の一声で、アメリカがナノテク分野に力を入れ始めました。アメリカが動くと世界が注目します。タイでもこの分野に力を入れようということになり、NSTDA(National Science and Technology Development Agency; タイ国立科学技術開発庁)のパイロット長官から新しいナノテクの国立センターをつくりたいので、手伝ってほしいかという話をもらったんです。私も今までやってきた研究分野と近い分野で、タイも今からこういう分野の研究をやらないと遅れてしまうと思っていたので快諾しました。そしてチュラ大でそのセンター計画に3年ほど携わり、

2003年にタイ国立ナノテクノロジー研究センター (NANOTEC) が設立された後はチュラ大を辞めて、初代のセンター長に就任しました。それが54歳の時でした。

そこでの任期は4年間で、その後、大学はすでに退職していたので、上級研究顧問としてサイアムセメントグループのSCG化学に入社しました。私はこれまで、大学で教え、大学院では直接指導したドクターは10名以上、マスターは150名以上卒業させています。また、研究では数多くの助成金を取得し、数多くの賞も受けています。研究論文は140本以上は書いています。特許も多少持っています。しかし、私の研究はこれまで実験段階レベルで留まっていて、実用化、商品化したものがまだありません。企業なら資金があり、研究に成功すれば商品化され、世の中に送り出すことができます。それは自分のこれまでの人生の中でまだしたことのないことで、やってみたかったことでした。

■ タイ人初の東工大教授に

これもセレンディピティですね。今回東工大に呼ばれたのも、昔の出来事が関係しているからです。タイに帰国してチュラ大に入った当時、タイでは天然ガスが見つかって石油化学などがかなり盛んになっていました。それでチュラ大の化学工学科でもこういった分野に力を入れようということになったのですが、予算がない。そんな時、東京の旭硝子財団が海外での研究助成金提供先を探しており、京大の桐栄良三教授の

紹介でこれをいただけることになったんです。助成金を受け京大や東工大と共同研究を行うことになったわけです。

同時に人的交流の部分については日本学術振興会 (JSPS) の制度を活用しました。京大、東工大の先生方と新しい共同プロジェクトを立ち上げ、私はタイ側のヘッドとして京大や東工大の先生方と行き来を繰り返しました。この交流は10年間続きましたからかなりインパクトがありました。この時東工大との関係が出来たんです。

こうしたご縁があって、数年前から退官された新山浩雄先生から後任ポストのお話をいただいたわけです。特任とかではなく正規の教授のポストです。タイ人がこういうポストにつくのは東工大の長い歴史の中で初めてなんです。

これまで、先生のキャリアに関するお話を伺ってきましたが、先生は日本及びアメリカの大学で学び、その後は長い間タイの大学で教え、また東工大の教授として日本で教えられた経験から、現在の日本の少子化、グローバル化の流れの中で変わりつつある日本の大学、そして変わらなければならない日本の大学について先生の観察、ご意見等伺わせてください。

■ 国際大学ランキングの意味するもの

今日本の大学が世界ランキングのトップからだんだん落ちていっているということは問題だと思います。文科省はランキング

が落ちることで海外からトップクラスの学生が来なくなることを心配しています。

さらに日本の場合は少子化ですし、もともと日本人学生は博士課程まであまり進みませんから、博士課程の学生はほとんど留学生で占められているという現実があります。その留学生の人数が少なくなると問題も出てくると思います。

日本人の場合、企業に行くのなら修士で十分という考え方があります。また、大学の博士課程を出てもそれに見合ったよい仕事はなかなか見つかりません。日本で就職する場合、タイと違って博士を持っても待遇面でのメリットがほとんどありませんね。しかし、タイの場合、博士は特別です。特に公務員はそうです。公務員では博士卒の初任給は修士卒の6年上です。日本はそういうメリットがありませんし、むしろ仕事探しにくい。また大学が独立行政法人になって教員の採用もアメリカと同じシステムになり、容易ではありません。

日本の大学は、かつては学生のほとんどは日本人ですから、大学の国際ランキングなど気にしなかったですね。日本で東大はナンバーワン、それで十分でした。しかし最近工学系の博士課程の学生の90%以上が外国人です。そうするとランキングが低いと優秀な人が来てくれません。

ランキングのポイントは研究の業績が一番高いわけですが、今世界中で同じような研究が同時に行われていますから、たとえその研究分野で日本が勝っていても差はわずかしかなさそう。そうするとその他でポイン

トを稼がないといけな。たとえば、女性や外国人の教員数、特に教授数などのポイントはそれほど高くないのですが、日本の場合そこがものすごく少ないので、そういう点で負けてしまうわけです。

日本は多くの素晴らしい研究結果を残し、数々のノーベル賞受賞者を排出していますが、留学生のほとんどは大学の世界におけるランキングだけを見て、行く国、大学を決めてしまいます。ですから、優秀な学生に来てもらうためには国際ランキングを上げていくしかないわけです。なにごとにも一長一短ですが、他国と競争するためにこれはやむを得ないと思いますね。

■ 大学での英語による授業

東工大での私の講義は大学院生向けのもので、英語コースなので全て英語で行っています。日本人学生の英語力は、昔に比べたら良くなっています。特に会話とかコミュニケーション能力は一昔前に比べたらたいへん伸びています。私の時代は京大の英語の先生でも英会話はあまり得意ではありませんでしたから（笑）。

学部の学生でも3年生の選択科目の中には全て英語で行われる授業もありますから、英語でとりたい学生はとることができます。私はそこでも教えています。こうした英語の授業を受ける日本人学生は、英語に関心があるとか、将来海外へインターンで行きたいといった人たちですね。私のレクチャーは話す内容を全てPower Pointで用意して行っているの、聞き取れなく

でもあとで資料を見れば理解できます。私の授業は全てそのようにしています。

ほかにインターナショナルプログラムといって全ての授業を英語で行うプログラムもありますし、科目によっては留学生がとりやすいように英語の授業も用意されています。

今はそういった努力を大学もしないとトップクラスの留学生は日本に来ないですね。トップクラスの留学生に来てもらわないと、だんだん大学の国際ランキングが落ちていく。留学生がどこの国の、どこの大学に行くかというのは、やはり国際ランキングが選ぶ時の指針になります。条件が許されれば、誰もが一番トップの大学に行きたいでしょう。

現在、日本の大学では大学院の授業の英語化を進めているところも多く、将来は学部の授業も英語で実施する計画があるようです。少しずつではありますが、日本の少子化、グローバル化にいかに対応してゆくか、日本の将来を見据えて教育も変わらざるを得なくなっているように思います。良いかどうかは別として、徐々にそうしていかなければならないと思います。

■ 企業のグローバル化の必要性和変革

日本の企業は長い目で見るとグローバル展開しないとダメだと思っています。そのためにはやはり英語が必要です。ある大企業の海外の工場は100%英語になっていま



す。海外に派遣されている駐在員が使っている言葉は全て英語です。また、私の知っている日本人はアメリカ系の化学系企業に勤めていますが、日本国内でミーティングをするときも、そこに外国人が一人でもいたら英語でやらないといけないというルールだそうです。

日本は少子化、企業のグローバル化で今後外国人従業員が益々増えていくと思います。もちろん外国人が日本語を話せば問題ないわけですが、英語を使えばさらにいい人材も採れるのではないのでしょうか。優秀だけど英語しか出来ないから、採用できないというのではもったいないですね。

ですから企業側も世界的に競争しようと

思ったら変わる必要があると思います。大学もそれは同じです。東大は、去年新学期を秋に移行しようとしてしました。それだけ学部にも優秀な学生が欲しいわけですね。それは事情があって実現しなかったんですが、そういうことは考えていけないと思います。インターナショナルコースを作るだけじゃなくて、入学の時期も大事ですよということですね。魅力的なコースがあってもタイミングが合わなければ学生は来てくれません。

ただ人は変化を好みませんから、もちろんこうした動きに反対する人もいます。ですから結局教授会とかの権限を無くして学長とか理事会とかが決定権を持つトップダウンでおこなっていかないと成功しないということでしょうか。

■ 日本留学のメリット・デメリットとは

まず海外に行くメリットというのは独立して、自立し、より自身のこと、国のことも考えるようになるということです。また日本はタイに比べて知識レベルが高いです。設備もものすごくいい。実験設備でもコンピューターでも分析機でも、タイより素晴らしいものが揃っている。

またこれは私にとってのメリットでもありましたが、異文化に直面するといろんな考え方がわいてくるということです。ものの見方とかが変わってくる。自分の国で、ずっと同じ環境で暮らしていると、ピンと来ないことにも海外に暮らしてみると大きな発見がある。そういうところも大きなメ

リットですね。

またもう一つ良い点は日本語という新しい言葉がマスターできるということです。そして、新しい友達、新しいネットワークが出来るということは非常に大事ですね。私はよく日本に來ているタイの留学生に日本人や他の国の留学生とのネットワークを作りなさいと言っています。

加えて帰国してからの就職の機会が増えるというのも大きなメリットですね。

デメリットとして、高校を出てすぐに大学から日本に來る場合はタイのネットワークが狭くなるということです。また日本語をマスターするのに時間がかかるという問題もあります。

■ 息子さんも日本に留学

私には2人の息子がいますが、2人とも日本に留学して現在はSCG化学で働いています。兄はカナダで修士を終了後、金沢大学で博士号を取得し、弟は京大で学士、修士をとりました。2人とも日本の文科省の奨学金をいただいて、私の影響もあり化学工学を専攻しています。今回私が東工大に來た理由の一つに、私自身と2人の息子に代わり、日本に対して感謝の気持ちを示したかったということもあるんです。

私はこの4月からまた上級研究顧問としてSCG化学に戻ります。

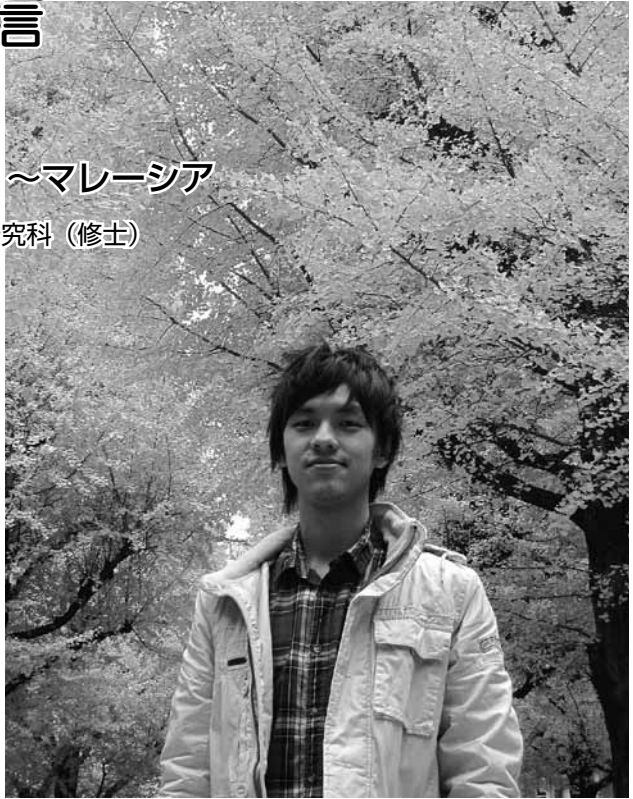
長時間、貴重なお話をありがとうございました。今後とも益々活躍されることを願っています。

私の日本留学と提言

劉 耀 強

Mr. Lew Yow Keong ~マレーシア

東京大学大学院 新領域創成科学研究科（修士）



東大の銀杏並木の下で

—— 大学院での研究テーマについて教えてください。

私がしているのは経済物理分野という、金融工学に近い金融に関する研究です。人間の経済活動を、統計物理学の視点から見るということをしています。

古典的な経済学というのは消費者＝人が「完全理性」という前提で発達してきました。人は世の中の全てのことに詳しく、愚かな意思決定はしない、という前提で議論を発達させてきているんです。

さらに古典的経済学では「均衡状態」が保たれておりバブルなどが発生しない。なぜかというとなんか賢くてもうかるチャンスを平等に持っていると考えからです。さらに「定常状態」といって価格も安定していて乱高下することはめったにないと仮定します。もともとの古典経済学にはこれらの仮定があるわけです。

でも現実には5年とか10年に一度、大変な金融危機がくるわけですね。つまりあきらかに古典的経済学には理論的に見逃していることがあるということです。

経済物理学ではこれらのことは仮定しません。ということは、マーケットは常に変化しており定常状態にはないと考えます。今のマーケットが本当に合理的かどうか、それは人間の経済行為によるわけです。みんながその株を買うと言えば自分も影響されて買うかもしれませんね。そもそも株とか資産はそんなに価値のあるものかどうかはわからない。バブルかもしれないけど、みんなが買うから買う。我々はそう考えます。

また古典的経済学がとるアプローチというのは、理論的なもの、数学の方程式などで導くきれいなものが多いですね。ですか

ら理論的な解析を行う場合、簡単なモデルしかたてられないという制限があります。全ての人は同一という仮定を立てなければ数学的な取扱いが非常にややこしくなりますから。

こうした理論的な制限を超えるため私たちが研究している経済物理学では全ての人々が同一である必要はありません。みんなバラバラ、それぞれが独自の考えを持っていますから。

具体的にどんな手法をとるかという、人を気体分子と考え、様々な大きさ、速度の分子を作ります。そして分子と分子がぶつかった時ビジネス上での取引が起きたように考えるわけです。人間の経済活動と自然で起きる現象をマッチングすることで、自然から得られた知恵を人間が作った複雑系システムにも適用できるのではないかと私たちは考えているわけですね。

このシュミレーションは10回やって10回違う結果が出ることもありますから再現性について批判されることはあります。しかし私たちが求めているのは一般性のある結果です。結果は毎回違うかもしれないけど、そこには不変な統計的性質があるはずなので、それを研究するんです。

そうやって研究、解析してみると、200年前の人間と200年後の人間、そして今の人間というのは実はあまり変わらないということがわかります。普遍的な統計的性質があるんです。時代が変わっても人間はあまり変わらないな、人間のネイチャーだな、面白いなあと思いますね。

——— 留学はいつから考えていましたか。

高校の時から留学したいと思っていました。小さい頃から数学と物理が好きだったので、高校生になって真面目に将来何になるかなと思ったら、エンジニアとか工学者がいいのではないかなと思ったんですね。それならずっとマレーシアでやっても面白くないと思い、絶対一度海外に出て勉強したいと思っていました。

国はどこでもいいと思っていましたが、親は支援はしてくれない、行くなら自分で行けという感じでしたから奨学金をもらうことが前提でした。

——— 留学先を日本にしたのはどうでしょう。

これは偶然ですね。運良くマレーシア政府の奨学金試験に合格したからです。私が希望した工学系には留学先の選択肢にいくつかのカテゴリーがあって、英語圏が一つ、もう一つのカテゴリーはフランスやドイツ、韓国など英語圏以外の国でした。私は英語圏を第一希望にしたのですが、結果的に日本に決まったわけです。でもだから残念だったかということそんなことはなくて、とても喜びました。やはり小さい頃から日本製品に囲まれ、ドラえもんやガンダムを見て育ちましたから日本に対しては強い親近感を持っていました。それに工学系を志望する私は人工知能とかロボットを作るのが夢でしたから、当時ホンダやソニーがロボット研究をリードしていた日本は憧れの国だったわけです。

ただ申込の時はやはり英語圏を選んでおいたほうが安全かなと思ったんです。実際片言の日本語もできないのに、将来日本で

勉強していけるのかなという不安はありました。

—— 木更津高等工業専門学校に入学されたそうですが、日本での生活はどうでしたか。

来日して3か月間は全てが新鮮で楽しくてハネムーンのようでしたね。でもその後現実に向き合わないといけなくなると、どうしようかなと。授業は十分に聞き取れない、クラスメートが周りで何を喋っているのかわからないので、その輪の中に入っていくことも出来ない。

わいわいと騒がしいマレーシア人と違って、日本人は大人しくて無口な人が多い、最初は日本文化に慣れてないせいもあってちょっとショックでした。もしかして自分は嫌われているのかなと思ったり、少し神経質になってしまった時もあります。でも少しずつ慣れてくると、もともと彼らはそういう性格なんだということが分かってきて気にならなくなっていました。

—— 勉強より人間関係が難しかったということですね。

そうですね。マレーシアの場合、一クラス40人なら30人以上は仲がいいんですが、日本では多くて5人、6人しか仲良くなりません。日本人はどちらかというとあまり大きなグループに参加したくないようです。4、5人で、テーブルを囲んで喋れるくらいの人数がちょうどいいように感じます。

マレーシアでもグループはできますが、いろいろなグループに参加するのが楽しみなんですね。日本の場合派閥みたいなものがある、このグループに参加すると他の

グループには参加しづらいといった雰囲気があるのではないのでしょうか。私はそういった感じには慣れませんでした。それは難しいことですが日本で生活する以上しょうがないという感じですね。

—— 高等工業専門学校（高専）での勉強は自分に合ったものでしたか。

実は高専に行って自分は工学系には合わないんだということに気付いたんです。高専ではこつこつ手を動かしてモノづくりをする地道な作業が中心になります。私は電子制御工学科だったので、どうしたらもっと優秀な電子回路を組めるかとか、もう30%省エネのトランジスターを組み立てるにはどうすればいいかといったようにです。わかっている技術を使って人のために役立つものを作るというのが使命なわけです。

私はどちらかというと、もう少し基礎的なもの、なぜ万有引力があるのかなど自然にあるもの、未知のものを発見し理解したいなあという思いを持ったわけです。私は冒険家タイプというか、わからないことがわかるようになることが楽しみなので、わかっていることを地道にやるのには向いてないんだということに気付いたんですね。もう少し大きな視野で見れるものが自分には向いているのではないかと、すごく悩みました。

—— 大学は東京大学（東大）工学部の計数工学科（数理コース）に進学されたそうですね。

東大の計数工学科を目指そうと思ったのは日本に来て2年目くらいです。日々悩む私を見ていた数学の先生がチャレンジする



旧正月のパーティーで仲間たちと

価値があると紹介してくれたんです。といっても東大ですから、最初は記念受験でもいいやという気持ちでした。将来自分の子どもの私は東大のあの教室に座ってテスト問題を解いたんだと教えられればいいくらいの気持ちでした(笑)。

—— 学部ではどのような勉強をしたのでしょうか。

まず数学と物理を勉強して、そのあと自然にあるものを対象として数理モデルを立てるということをやりました。数学を応用して予測できない人間活動を予測できるようにしていく。なぜこういう現象がおきるのか、その背後のメカニズムなどの数理モデルを立てて、パソコンで予想してシミュレーションをするんです。そうやって数学ができるようになると経済や金融に関する数理モデルもけっこう面白いなと思うようになりました。

—— 思い描いていた日本留学との違いはありましたか。

来る前に考えていたのは幸せな留学生

活ですね。頻繁に国内を旅行するなど、高校の同期が羨むような生活になるんだろうと思っていました。

でも現実にはそうではないですね。留学生活は厳しいです。時間的な余裕はほとんどありません。レポート一つ書くのも留学生は日本人の何倍も時間がかかります。日本人がスラスラ一つの文章を書くところ、留学生はこの文章を

どういうふうに表現すればいいか、書いては止まり、ネットを検索してまた書いて、よくよく考えたら違うなあとまた最初から書いて・・・たぶん日本人の5倍くらい時間はかかります。インプットは2-3年で慣れてきますから、勉強すれば日本人には負けませんが、アウトプットのほうになるとだいぶ日本人との差は広がりますね。

—— それは英語圏の国に行っても同じではないですか？

ちゃんとした文章を書くのなら、日本語の方がずっと難しいです。なぜなら日本語という言語は日本人しか使わない言語だからです。つまり日本人が日本語に求めるレベルというのはものすごく高いわけですね。

英語というのは世界共通言語なので、許容限界値が日本語より低いと思います。ネイティブと同じでなくてもこのくらい通じれば十分と世界中の人は思っています。

あと、やはり英語は世界中の人が使っていますから、わかりやすい文章を求めていますね。日本語の文章と英語の文章を比較

するとあきらかに日本語の文章はわかりにくい。わざと難しく書いているんじゃないかと思う時もあるくらいです。日本人は日本語に対して、わかりやすさよりも清らかさを求めているんです。

だから今でも書く時は圧倒的に英語が簡単ですね。論文も絶対に英語で書こうと思っていました。

—— 論文は日英どちらの言語でも大丈夫だったんですか。

東大はグローバル化したいので英語で書くことを推奨しています。学部によっては英語で書くことを義務づけられている場合もあります。それに修論とか卒論を英語で書くと、後々国際的な雑誌などに投稿したりする機会があった場合、編集するだけで済みますから、そういう意味でも英語で書くのと得なんです。

—— 東大という環境はいかがでしたか。

みんな真面目で、意識が高く、積極的な人が多かったです。常に将来自分は何をやる、何になるといった意識を持って学んでいる。留学生には対しても積極的に声をかけてくれますし、一緒に活動したいという人が多いですね。例えば英語ランチというのがあって、毎週金曜日にどこかに集まって英語でランチをしましょうとか。そういうのがいろいろあるんですね。

また、同じクラスの人との勉強会、難しい数学の本を輪読して毎週違う人が発表するというのもやりました。お互いに読んで理解したところを解説しあうんです。

みんな常に今日やったことは昨日の自分を良くするためという心がけで行動してい

ますから、そういう姿に自分も感心し、非常にいい刺激を受けました。

—— 日本留学は成功だったということでしょうか。

もともと東大に入れるとは思っていませんでした。東大に入った時点で、自分の留学は自分の予想を超えたなあと思いました。ですからある意味では成功だったと言えますね。

—— では大学で問題に感じたことはありますか？

あえていうと、学部の時はもう少ししっかり基礎的なことを講義してくれたらと思いました。私は東大の一学部しか知りませんが、先生方はご自身の研究内容を題材に授業をされるのが好きですね。それはそれで貴重なお話なのですが、学部生である私たちには難しすぎて、ついていくのが精一杯です。日本の大学はグローバル化を叫んでいますが、そのためにはまず研究と教育をはっきり分けるべきではないかなと思います。

そう考えると、日本の教育システムの弱点はシラバスが統一化されていないことではないでしょうか。日本の場合、先生の自主性がある程度尊重するという理念があるように思います。ということは、同じ大学でも講義を受けた先生によって教育の質に差が出てしまうかもしれません。それはどうなのかなと思いますね。

ただ研究については文句はありません。優秀な教授が多くてさすが東大だなと感じました。

—— 生活面での不満はいかがでしょう。

外国人として日本人の信頼を勝ち取ることが難しいことです。

それに関して個人的に一番ひどい経験は部屋探しでした。東大に入って、東京に引っ越してくるようになったのですが、どこの不動産屋も、外国人はごめんなさいという感じで取り合ってくれない。7回目に電話をしたところでやっとお店に来てくださいと言われたんですが、今度は受け入れてくれる大家さんがとても少ない。確かにいろいろな外国人がいますから、心配な気持ちはわかるのですが、一概に決めつけなくて欲しいですね。

また日本人はルールを重んじますね。それはとても良いことだと思いますが、時には融通を利かせてほしいと思う時もあります。私は大学への入学時、3月の初旬くらいに引越しをすることになったので大学に連帯保証人をお願いしたのですが、ルールだから入学する4月1日まではダメだという。4月1日になったらもういい物件はありませし、それまで住むところもありません。そういうことはまったく考慮してくれない。

海外から招聘する留学生にはいい寮を用意していろいろと世話をするのに、もともと日本にいる留学生に対しては自己責任で自分で考えろという。それは内と外の間隔をはっきり分けすぎですね。外からの来賓に対しては非常に面倒見が良いのに、そのグループに入らないと「ルールだから」ですまされてしまう。それは日本での留学生活で感じた不満です。

——— 日本留学をマレーシアの後輩に勧め

らますか？

どんな目的で日本に来るのかによりますね。先ほども言いましたが、日本は最先端の研究をする場としてはとても良いと思いますが、学部教育ならもっと良い選択肢があるかもしれません。

理系の場合ですが、普通のマレーシア人留学生だったら東京近辺の国立大に入れたら優秀な方だと思うんです。なぜならマレーシアと日本の教育は重点の置かれ方が違うからです。日本人は幼い頃からマレーシア人より難しい数学をずっとたくさん勉強していますし塾にも通っています。東南アジアの我々が簡単に勝てると思うのは楽観し過ぎですね。ちょっと現実に向き合いたいでしょう。

日本人は大学に入って4年間遊んでいるかもしれませんが、もともとの基礎が我々とは違います。だからマレーシアの教育制度においては非常に優秀なマレーシア人でも日本の上位の国立大学に入るのは難しいのではないかと思います。

ですからもし同じ留学費用を使うのなら、教育の重点がマレーシアに近いシンガポールやオーストラリアなど英連邦の国をお勧めします。日本語の苦勞もありませんし、その方がもっと自分の長所を伸ばすことに時間を割けるのではないのでしょうか。つまり、素材によって適切な加工場所があるのではないかということです。

その上でもし日本に来たいのであれば、大学院から来ればいいんです。

もちろん日本が好きな人、日本語を学びたい人、日本文化、デザインやアニメ、ファッ

ションを学びたい人には、私は日本留学を推奨します。自分が何を求めて日本に留学するのかを良く考えて決めて欲しいですね。

—— 劉さんは日本で就職するという選択をしましたね。

自分は日本に留学して、マレーシアではできないことをたくさん経験しました。マレーシア人だからという理由でマレーシアの大臣とか大企業の社長さんとか、いわゆる偉い人にたくさん会えました。マレーシアにいたらただの一マレーシア人ですが、ここでは特別なニーズというか、付加価値の高いことができるわけです。

つまり日本にいて、私にとっては大変なこともあるんですが、自分が周りと違うから周りと違うことができるわけですね。だから日本社会に出てそういう役割を担ってみたいと思ったんです。

留学生はいつも口癖のように「掛け橋になりたい」と言いますが私が掛け橋になれるかどうか、それは周りとは違うことを生かせるかどうかだと思います。違うことを違う側面で違う視野を持って違う方法でやる。何が出来るかはわかりませんが、もしかすると全部ダメかもしれませんが、チャレンジしてみたい。日本に残ることが正解かどうか今はまったくわかりませんが、とりあえずチャレンジする価値はあるわけですね。

—— 就職先は金融業界ということですが、これからの目標を教えてください。

最初の5年間10年間は勉強して、金融の専門家になりたいですね。それが短期的な目標です。長期的な目標は表現しにくいで



ハロウィンパーティーで仮装中

すが、この業界のスタープレイヤーになりたいです。山の一番頂上はどんな景色なのか見てみたい。

それと同時に、世界を動かすマネーの裏のメカニズムを研究者の視点で見たい。背後で何が起きているのか。それが世界にどういう影響を与えるのか。それを知りたいという思いがけっこうありますね。とにかく、楽しみながら仕事をしていきたいと思っています。

リュウ ヤウキオン 2007年4月来日、木更津高等工業専門学校電子制御工学科を経て2010年4月東京大学工学部計数工学科入学、2013年4月同大学大学院新領域創成科学研究科入学、2015年3月修了（修士号）

寄稿

改

変

成

真

(まことへかえよう)

劉彩品

去年の12月、私が義兄の逝去で台北にいた時、台北市民の“柯文哲旋風”に出会いました。柯文哲という名の医師が彗星のごとく現われ、“改変成真”(真(まこと)へ変えよう)のスローガンを掲げて旋風をまきおこし、台北市長に選ばれたのです。「まと」をついた言葉、見慣れた政治家像と違うタイプ(別称「野生の柯」)で人気が高まったようです。彼の発言は単刀直入で時には失言になるが愉快です。例えば:『政治はむずかしくない、良心をとりもどすだけでいいのだ』;『你不管政治, 政治就來管你』(政治に介入しなければ、政治が介入してくるぞ);『核四問題については、台湾の次世代に何を残すのかを考えれば、答えは簡単、ノーだ』(『核四』は市民運動によって建設一時ストップになった台湾の四番目の原発)など、痛快です。柯文哲の著書『改変成真』を読みました。柯文哲の医師から市長への物語で面白いと思いました。

物語の始まりは、ある医療事件が理不尽に処理されたことに対する怒りです。柯文哲は台湾の重症医療の発展に大きく寄与した医師ですが、「怒り」を転じて医師から政治家への道に踏み込みます。「我々は次の世代にどのような台湾を残すのか。現状のような混沌状態をそのままにするのか。あるいは、思想・文化を変えることによって、台湾の未来をよりよい社会に変えていくのか。」と自問し、アスベルガー症候群を持つと自称する彼は、台北市の市長選に立候補することを決意しました。医者辞するにあたっての弁は、「上医医国、中医医人、下医医病(上医は国をいやし、中医は人をいやし、下医は病をいやす)」です。医者だった孫文、蔣渭水のように、上医になって病んでいる国を治したい、と言うのです。

立候補にあたって柯文哲は考えました:20年来台湾の政治は、中国との統一か、あるいは中国からの独立か、という問題ばかりに翻弄されてきたが、「人を中心にする」という本来の政治に立ち戻ることは出来ないだろうか、と。そのためには統一の国民党(藍)か、独立の民進党(緑)かの二者択一という状況をリセットしなければならない。そこで藍緑を超える無党派大連合を呼びかけて、無党派候補者として台北市長選に臨んだのです。

柯文哲の「人を中心にする」政治とはどのようなものか?『改変成真』の中で次のように書いています:「政府の存在目的は一体何であるのか?それは「為人民服務」(市民に奉仕すること)ではないだろうか:市民が欲することについては推進方法を考える、

市民が嫌がることについては改善方法を考える。」。過去300年間、民主政治の主流だった代議政治や政党政治は、いまや人民の要望に答えられなくなっている。したがって、「開かれた政府、全民参加」の民主政治を基本として、政策の重点は、食、医、住、交通、教育、娯楽など民生問題の充実にある、としています。市民の直接参加によって、市民にとって切実な問題を解決することに重点を置いているのです。台北市を人が人として過ごせる、尊厳を持って生活できる公義社会、歴史を尊重する文化社会、健康にして安全、弱者にやさしい社会に変えるのだ、という主張です。

選挙運動の形式も独特でした。「青年オーディション計画」によって選ばれた若者を選挙チームに組織し、若者が主体のインターネット選対を立ち上げ、選挙募金、人材募集、宣伝活動など、インターネットを駆使する選挙運動を行いました。そして、これは単に選挙運動であるだけではなく、90年前、蒋渭水によって提唱されながら未完成に終わった新文化運動を継承する運動でもある、と宣言しました。このようにして、思想、文化、制度の変革を目指す市民運動が素人政治家の柯文哲市長を誕生させたのです。

『改変成真』の物語はハッピーエンドに終わりました。続篇は『為人民服務』の台北市政府の施政を待つことになります。市長になって二ヶ月、市政公開は、インターネットによる市政府役員募集、市予算編纂への市民参与、市民の要求による道路障害物の撤去など、選挙公約が市民の目に見える形で実施され、今のところ、台北市での柯文哲旋風は続いています。

この物語で「政治の存在目的は『為人民服務』である」という文句を見たとき、台湾の歴史

の変化に触れた思いがしました。小学生の私に魯迅の『阿Q正伝』を図書館の本棚からおろし薦めてくれた何老師（先生）のことを思い出すのです。何先生はある日忽然と学校から姿を消しました。大人たちの話によれば捕えられたそうです。罪名は共匪とのこと。『阿Q正伝』も1950年以降禁書に指定された本の一冊です。その共匪の頭目ともいえる毛沢東の言葉、「為人民服務」が、新しい台北政府の政治の目的になっているのです。

柯文哲が先人として尊敬し、目標とする蒋渭水（1890 - 1931）は、日本の台湾植民地時代（1895-1945）に「台湾人の台湾」というスローガンを掲げて、植民地反対運動を行い、台湾総督府によるアヘン販売（専売制）や霧社事件（高砂族虐殺）を国際連盟に訴えるなど、台湾問題を国際社会に訴える行動を起こしました。台湾文化協会、台湾民報、台湾民衆党、台湾工友聯盟の創立者でもあった蒋渭水は、台湾人が人としての尊厳をもって生きられる社会を目指す闘いに、40年の生涯を捧げたのです。

甲午戦争（日清戦争）によって日本の植民地にされた台湾で蒋渭水が掲げた人間宣言は、120年後にめぐってきた甲午年（2014年）の台湾で政治の旗印になりました。台湾では、人々が尊厳を踏みにじられた歴史を胸に刻みながら、尊厳をもって生きられる社会に変えようとする大きなうねりが起こっている、と感じました。

この物語を聞いたら穂積五一先生は喜んで下さるでしょうと、先生からの最後のお手紙を思い出しています。一ツ橋の学士会館で会議の休憩中に書いたはがきには、歴史の記憶を曖昧にし、人間を軸に考えることを忘れた「日本の世相」への嘆きがありました。

バンコクの泰日工業大学で活躍するスタッフ＆先生によるリレーエッセイ

泰日工業大学 (TNI) 奮闘記

⑩ 思い出は教室の外で

安武 光

「先生、今日の午後は暇ですか。タイダンスをするので、来てください。」授業で教えているタイダンスクラブの学生に声をかけられた。学内で何かイベントがあると、そのクラブの部員達が、タイの楽器を演奏したり、音楽に合わせて伝統的な踊りを披露したりする。

タイダンスクラブの他にも、合唱クラブ、折り紙クラブ、武道クラブ、太鼓クラブなど、いろいろなクラブがあり、多くのイベントに参加している。キャンパスでは、クラブ活動に限らず、ギターを弾きながらみんなで歌ったり、囲碁、カードゲーム、バレーボールなどをしたりして盛り上がる学生達の姿を目にする。

以前、私はバンコクの日本語学校で教えていた。日本語教師を目指し始めた頃は、大学で教えるのに比べて、さまざまなタイプの学習者が集まる日本語学校で教えるほうが、より多くの出会いがあっておもしろいだろうと考えていた。しかし、日本語学校では、授業でしか学習者に会わない。それに対して、大学の学生には、廊下や食堂、バス停といった教室以外の場所で会うことも多く、その分、深い関係を築くことができる。

また、学校行事やイベントなどもたくさんある。学園祭は、普段教えている学生の本当の姿を知るチャンスだ。勉強は今ひとつの学生が日本人も顔負けの折り紙の名人だったり、教室では目立たない学生がカバーダンスを披露していたり、授業では引っ込み思案な男子学生がカラオケコンテストでAKB48の曲を一人で熱唱していたり、いつもはおとなしい学生がコスプレをしていたりする。

タイダンスの発表を見ようと、学生に言われた時間に行くと、「じゃあ、先生、お願いします。この楽器を、このぐらいのテンポで打ち続けるだけです。」と言って、拍子木を渡された。演奏する部員が足りなくて呼ばれたのだった。

学生時代、私はアルバイトばかりしていた。教室で授業を受け、食堂でごはんを食べ、アルバイトに向かう。そんなつまらない大学生活を送った私には、タイの大学生がうらやましい限りだ。タイの伝統的な衣装の学生達の中に、一人だけスーツ姿の私。学生時代をやり直すために、タイムマシンでやって来たような気持ちになった。

演奏が始まり、ダンスも始まった。カチ、



▲タイダンスクラブの学生達



▲休み時間のおしゃべり



▶太鼓クラブの学生達

カチ、カチ……。何事もなく順調に進んでいく中で、ひとつの疑問が頭の中に浮かんだ。「これ、どうやって終わるんだろう？」発表の前はバタバタしていて、曲の終わり方を確認するのを忘れていたのだ。私のミスで学生の発表をぶち壊すわけにはいかない。私の気持ちとは関係なく、演奏は続いた。

そんなハプニングもありながら、何と

か無事終了することができた。その日の出来事は私にとっていい思い出になった。4年間の大学生活の中で、学生はいろいろな思い出を作るだろう。そして、そのほとんどは教室の外での出来事のはずだ。これからも積極的に学生とコミュニケーションを交わして、授業でも、授業以外でも思い出に残る教師でありたい。

安武光（やすたけひかる） 泰日工業大学教養学部日本語講師。2008年バンコクへ。日本語学校講師を経て、2010年より現職。

日本語の楽しさを全ての著者に！

蔣 孝佩 (Ms. Chiaug Hsiao-Pei) ～台湾

東京デザイン専門学校 イラストレーション科リアルイラスト専攻 2年

日本語の魅力

私は台湾の大学で日本語を専攻し、卒業後、高校の日本語教員をしていました。日本語を専攻した理由は、高等専門学校時代の先生の影響です。とにかく優しく面白くて、日本語がどんどん好きになっていったんです。日本語能力試験も3級まで順調に合格して、日本語は自分には向いている、難しくないと思ったんですね。

ところが大学に編入するには2級レベルの能力が必要で、3級と2級とでは大きな差がありますから、この時、初めて日本語を学ぶ苦労を感じました。

日本語の好きなところはリアクションです。「そうよね～」とか「へえ～」とか。とてもかわいくて面白く聞こえるんです。それに、日本語は中国語と違って発音通りに書くと

濁音になることがある。例えば会話の中で「わたし」は「わだし」に聞こえるんです。でも歌だとちゃんと「わたし…」と言っている。そういう発見



がいくつもあって勉強するのに飽きないんですね(笑)。

日本語の人気ですが、今も台湾の高校では高いものがあります。商業高校には日本語学科があるのが当たり前です

し、普通高校でも日本語のクラスは他の言語よりも人気があります。韓流の影響で韓国語を学ぶ人も増えましたが、韓国語(ハングル)はひらがなより難しいので学んでもすぐに諦めてしまう人が多いようです。日本語のほうが教材もたくさんあって台湾人には親しみやすい言語なんです。それに台湾人は日本製品やファッション、日本旅行が大好きですから。

日本語学習書を執筆

私が本を書いたのは、「ひらがな」が難しいと思っている生徒たちにもっと日本語を面白く勉強してもらえないかと思ったからです。『你也繪50音』はイラストから文字を連想してもらえるように作ったものですが、まず5文字を作ってみて、それを持って出版社に声をかけてみたところ、面白



蔣さんの著書2冊。『你也繪 50 音』と『微・日・語』。『微・日・語』は Facebook 用に様々な日本語表現が記載されるなど日本人とのコミュニケーションがすぐにとれるよう工夫されている

いからやってみようということになりました。3年間先生をやっていて、日々生徒たちからいろんな種をもらい、それを育ててみたら本になったという感じですね。売れ行きは順調で今は二刷り目になっています。

憧れの日本留学へ

日本への留学はずっと夢でした。日本語教員として、今教えられることは全て教えて空っぽになってしまったということ、自分は絵が好きなのでその力をもっと伸ばして日本語教育と融合させたいと思ったこと、日本での生活を体験しておくことがこれからの教員生活の財産になると思ったからです。

留学してみて感じるのですが、やはり日本語は難しいですね。同級生はみんな若いので若者言葉が頻繁に出てき

て、それらも覚えて使っていないと仲間に入っていけない。でもそれに慣れてしまうと、先生や寮のスタッフの方と話している時にもそういう言葉を使ってしまう。そのスイッチの切り替えが本当に難しい。たとえば「やばい」という言葉は悪い言葉だと思っていましたが、こちらに来てみると女の子でも普通に使っていて、その意味もけっこう広い。「やばい、かわいい!」とか。今は本当に毎日のように聞いています。それはある意味カルチャーショックでしたね。

ほかに日本で感じるのは、ここで生活するにはどこにも書いていない暗黙のルール、礼儀が必要だということです。電車の中でもお店の中でも書いていないルールがあって、それをみんなが暗黙の了解で守って行動しているように思います。台湾でははっき

りルールとして示さないと守られないようなことでも日本人は守って行動している。そういったところには改めて感心しています。

留学は若いうちに！

もし留学するのなら若いうちに行ったほうがいいと思います。大学を卒業してすぐとかですね。もちろん経済的な問題がなければですが、歳をとってしまうといろいろ考えなければならぬことも増えますし、体力も周りの学生とは違います。周りは19歳、20歳で、放課後ワイワイ一緒に遊びに行ったりしますが、私は毎日の勉強が精いっぱい付いて行けない。もしもっと若ければ一緒に楽しめるのになと思う時はあります。留学は学ぶだけじゃなくてその国のその世代の文化を楽しむ事も大切だと思いますから。



高校の生徒たちと



蔣さんの作品（リアルイラスト）



それから、進学先を大学か専門学校かで迷っている人がいるかもしれませんが、学歴をとるのなら大学ですよ。でも専門学校は、やりたいことが決まっているのなら、学べる喜びとか満足感が高いですね。社会に出るのも早く、入学してすぐキャリアデザインなどの授業が始まりますから、日本人の学生も大学生に比べるとみんな少し大人っぽいかと思います。求人票も普段からたくさん見ますし、その辺は大学とは違うところだと思います。

ただもしチャンスがあるのなら、私はこのあと美術系の大学院に行きたいと思っています。大学院に行けたら将来美術も教えられるようになりますし、大学にも活躍の場を広げられますから。

とにかくみんなに言いたいのは“諦めない”という事です。日本のドラマで聞いた

好きな名言があって、それは「止めたら終わり」という言葉です。間違えても大丈夫。でも続けなかったら、やらなかったら後悔する。一度だけの人生なので、やってみたいと思うのならやってみてほしい。そしてがんばって結果を出して欲しいと思います。

ただ準備はきちんとしてくれること。私はあまり留学のための準備の時間がなく、その結果、日本に来てから何度も引越をすることになってしまったなどの問題が起きました。留学には思い切りも必要ですが、同時によく計画を立てて準備をして来る事が大切という事です。

日本語教師という職業

教師が楽しいと思えるのは、学生一人一人に自分が影響を与える可能性があるということです。今じゃなく

てもその人の未来のどこかに自分の一言が影響されるかもしれない。そう思うと責任感は重大ですが、やり甲斐も大きいです。

私はできるだけたくさんの若者に何らかの影響を残したい。例えば日本語は今まで学んできた数学や英語の成績は関係ないんです。日本語を通じて自分にもできる、学べるという気持ちを感じてもらいたい。だからどうしても全ての生徒に日本語に興味を持ってもらえるのか、それを考えるのも面白い。例えばテストにもイラストを多用すれば、もっと楽しくやる気をもって答えてくれるかもしれない。

私の夢は台北にある全ての高校で日本語を教えるということです。一人でも多くの若者に日本語の楽しさ、新しい言語を話す喜びを伝えたいと思っています。



奨学金情報

※ 奨学金情報は Japan Study Support のホームページよりご覧いただけます (<http://www.jpss.jp/ja/>)

橋谷奨学会奨学生

- 対象：①専門学校（1年以上の専門課程）、大学または大学院（研究生含む）に在学または入学を許可された私費留学生 ②インドネシア共和国国籍を有し、修学または研究のため student visa で来日している者 ③インドネシア共和国大使館に来日の報告をしている者。（領事館のみの届出は不可） ④日本の政府等、他財団から奨学金を受けていない者 ⑤年1回の「橋谷奨学生文化交流懇親会」に参加できる者（毎年9～10月頃開催） ⑥奨学金支給終了後も当会との通信等を継続する意思のある者
- 支給金額：月額10万円（ただし応募諸状況

を勘案し、正規の奨学金額を変更して採用する場合もあり）

- 支給期間：学校を卒業・修了するまで
- 募集人数：若干名
- 応募方法：必要書類を在籍学校事務局へ提出
- 応募締切：4月30日（必着）
- 問合せ先：在籍大学・学校担当窓口
- 主催者：公益財団法人 橋谷奨学会
- 〒134-0084 東京都江戸川区東葛西 3-17
- Tel 03-3689-1120
- E-mail hashiya-scholarship@tsukishima.co.jp

インナートリップ国際交流協会

- 対象：①原則として、大学学部生は30歳まで。大学院生は35歳まで ②大学学部生は3年次以上、大学院生は修士課程1年次以上であること ③聴講生及び研究生は除く ④国籍は東南アジア、中南米諸国であること ⑤月額7万円以上の奨学金を受けていないこと

- ⑥心身共に健康で、人物・学力共に優れていること ⑦国際理解と国際親善に関心をもち、かつ、貢献すること ⑧学長推薦があること ⑨当財団の指定校で首都圏存在の留学生であること

- 支給金額：月額5万円

●**支給期間**：原則として、22か月を限度とする。ただし、期間内において卒業・学業を終了した場合は、奨学金の支給を終了する。延長は原則認めない。

●**募集人数**：若干名

●**応募方法**：在籍する大学の留学生課を通して財団宛に郵送にて提出すること。

●**応募期間**：2015年4月20日(月)～5月20日(水)

●**問合せ先**：〒160-0041 東京都港区麻布台1-9-8 霊友会第三ビル 財団法人インナートリップ国際交流協会事務局

Tel03-3585-2533 FAX03-5563-2547

URL : <http://www.itf.or.jp/index.html>

イベント情報

第56回 外国人による日本語弁論大会 (東近江市制10周年記念) 出場者募集

世界の人々に日本語で意見を発表する場を提供することにより、日本や国際社会のあり方をお互いに考え合うことを目的としています。1960年より毎年開催され、その模様はNHKテレビで放送されます。第56回大会は以下の要領で開催される予定です。

●**日時** 2015年6月13日(土) 午後1時開始

●**開催場所** 東近江市立八日市文化芸術会館(〒527-0039 滋賀県東近江市青葉町1番50号)

<http://yokaichi-bungei.com/access>

●**演題** 自由(ただし伝導、宣伝に類するものは不可で、未発表作品に限る)

●**制限時間** 6分以内(時間超過は減点の対象となります)

●**出場資格** 次の①～③の条件を同時に満たす方

①母語が日本語以外であること

②大会当日の年齢が満15歳以上であること

③過去のこの大会で外務大臣賞または文部科学大臣賞を受賞していないこと

●**予選審査** 録画したスピーチおよび原稿を審査し、本大会出場者を選抜します。

●**応募方法** 下記①～④を締切日までに郵送してください。

①所定の申込書に記入(申込書は国際教育振興会のホームページからダウンロードできます。)

②スピーチを録画したメディア

③スピーチの原稿(A4サイズの用紙に出力または書いたもの)2部

④顔写真1枚(3cm×4cmで顔がはっきりと写っているもの)

※ 応募の詳細は下記ホームページでご確認下さい。

●**応募締切** 2015年4月24日(金)

●主催 しゅさい こくさいきょういくしんこうかい こくさいこうりゅうきぎん ひがしおうみし 国際教育振興会、国際交流基金、東近江市

●問い合わせ先 と あ さき

いっばんざいだんほうじん こくさいきょういくしんこうかい 一般財団法人 国際教育振興会 〒160-0004 とうきょうとしんじゅくくよつや 東京都新宿区四谷1-21

TEL : 03-3359-9620 FAX: 03-3353-8908

ホームページ : <http://www.iec-nichibei.or.jp> Email: benron@iec-nichibei.or.jp

2015年度第1回 日本語能力試験

にほんごのうりよくしけん にんてい がっこう たんい そつぎょうしかくにんてい きぎょう ゆうぐう しゃかいてき しかくにんてい
日本語能力試験の認定には、学校での単位・卒業資格認定や、企業での優遇、社会的な資格認定など、

さまざまなメリットがあります。

●試験日：7月5日（日）
しけん び

●実施レベル：N1からN5までの全レベル
じっし ぜん

●試験会場：全国主要都市
しけんかいじょう ぜんこくしゅようとし

●申込み受付期間：3月30日（月）から4月30日（木）
もうしこ うけつけきかん

●受験料：5,500円
じゅけんりょう

●申込み方法：①インターネットによる申込み（<http://info.jees-jlpt.jp/>）
もうしこ ほうほう

②郵送による申込み（全国の主要書店にて受験案内（¥500）を購入）
ゆうそう もうしこ ぜんこく しゅようしょてん じゅけんあんない こうにゆう

●主催：公益財団法人 日本国際教育支援協会（JEES）<http://www.jees.or.jp/>
しゅさい こうえきざいだんほうじん にほんこくさいきょういくしえんきょうかい

Photo Letter



会員の橋本イスラムヌールさんから送られてきた PhotoLetter です。昨年6月にブノンベン（カンボジア）にオープンしたイオンモールの写真です。同店にはイオンスーパーのほか約190店の専門店が出店、うち日本から約50店舗が出店しているとのこと。開店直後の週末には1日10万人近い人が訪れているとのこと。

MEMBERS

〈会費とご寄附の報告〉

2014年12月

正会員

(2口)

榊 正義 港区

(1口)

福本 一 船橋市

鶴尾 能子 横浜市

土屋 元子 千葉市

田中 千佳子 江東区

高木 桂子 墨田区

西田 祥子 安城市

牧野 政子 宝飯郡

川口 善行 大田区

古川 恵世 矢板市

池野 朋彦／晶子 横浜市

岩井 秀明 川越市

井上 駿 平塚市

伊藤 順 安曇野市

斎藤 伸子 豊橋市

(有)ブルミエ-ACA 松戸市

土居 征夫 世田谷区

小原 正敏 土浦市

菅谷 真人 千葉市

田守 智恵子 札幌市

田中 洋一 柏市大

池森 亨介 宇都宮市

A.W. 横浜市

中元 管根 西之表市

真利子 知之 中野区

三橋 隆資 習志野市

香月 恵美子 川西市

北林 保之 中川郡

小林 浩 松戸市

鈴木 秀明 豊橋市

松岡 弘 相模原市

金野 隆光 柏市

野村 美知子

佐々木 孝一

堀 香奈美

中畠 正喜

富永 昭太郎

高柳 直正

新田 宜子

寺門 克郎

勝山 桂香

工藤 幹雄

福 壤二

林 登居／ひさ子

小川 輝夫

田井 亮吉

清水 国夫

石渡 荘介

菊池 幸子

(株)デリー

池田 俊二

安藤 哲生

山本 仁

ご寄附

山崎 光郎

土屋 元子

榊 正義

金野 隆光

酒井 杏郎

太田 京子

東京第一友の会

稲垣 史

伊佐 玲子

佐倉市

文京区

横浜市

川崎市

町田市

北区

西東京市

習志野市

千葉市

文京区

横須賀市

八千代市

上尾市

神戸市

中郡

足立区

笠間市

文京区

横浜市

小金井市

伊東市

横浜市

千葉市

港区

柏市

渋谷区

神戸市

豊島区

足立区

下都賀郡

正会員

(1口)

小川 巖

外山 経子

堤 祐子

高道 俊彦

大益 牧雄

今泉 雅勝

松崎 松平

中原 和夫

伊藤 源之

工藤 博司

杉浦 貴和子

小田中 聰樹

植田 泰史

田川 明子

北星学園大学国際交流センター

入間市

八王子市

江東区

富山市

京丹後市

墨田区

世田谷区

那覇市

東久留米市

酒田市

港区

仙台市

那珂市

港区

札幌市

ご寄附

近藤 清子

山口 憲明

酒井 杏郎

仁木 美代子

築山 淳子

工藤 幹雄

深澤 のぞみ

夏井 町子

中原 和夫

川崎 依邦

秩父市

日野市

渋谷区

文京区

文京区

文京区

金沢市

板橋区

那覇市

大阪市

2015年1月

特別会員

張 瑞騰

台湾

賛助会員

佃 吉一

板橋区

皆様の暖かい御支援に感謝申し上げます

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人です。財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名 称：公益財団法人アジア学生文化協会
ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設 立：1957年（昭和32年）9月18日
故穂積五一氏創設

目 的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◇主な事業◇

- (1) 留学生宿舍の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営（進学希望者向けの日本語を中心とする教育）
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

◇会費（年額）◇

正会員 1口 1万円
賛助会員 1口 5万円
特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円（学生2千円）でお送りしています。

当財団に対する寄附金は、所得税、一部自治体の個人住民税、相続税、及び法人税の税制上の優遇措置があります。

本誌で広告してみませんか。

団体・企業を問わず、編集部へご相談ください。

おかげさまで、当財団は2014年4月1日に公益財団法人に移行しました。これまでご支援いただきました皆様には大変ご迷惑をおかけしておりましたが、これにより会費並びに寄附金は税制上の優遇措置の対象となります。今後とも、皆様のご支援の下、これまでと同様留学生宿舍の運営、留学生への情報提供、同窓会活動等の活動を通じ、アジアの青年の育成と友好親善のために微力を尽くす所存です。引き続き皆様のご支援を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

後 記

本号インタビューのタイのWiwut先生とは、1987年に私がタイのTPAに赴任して以来の知己である。今回先生の話を変えて伺い、留学がその人の人生に与える影響に、人生に占める大きさに、改めて思いを巡らせた。現在、日本の高等教育機関で学ぶ留学生の数は約14万人、様々な国から様々な経緯で来日し日々学ばれていることを考えると、私たちの仕事も数は増えても一人一人と誠実な対応が求められる。少子化、グローバル化の中での日本の大学の変革の必要性についての先生のご意見は大変興味深く納得はするが、どこまで変わるか、変えられるかは当事者である大学のみならず、広く議論の必要性があることでもある。(F)

アジア文化会館では今年も退寮シーズンを迎えた。学生の中には目指していた大学に入らずそれによって専攻分野が変わる者もあり、まさにここが人生の分かれ道。アルバイトに時間を割かれながらも日夜勉学に励んできた彼らを見てるとなんとか望みを叶えてあげたいがそうもいかない。この先どんな未来が待っているのか。いつも明るく前向きな彼らのことだから心配は無用だろう。数年後、笑顔で留学生生活を語ってくれる姿を想像しながら、今は「元気で」の一言を贈りたい。(K)

(お詫びと訂正)

本誌512号(2014年12月・2015年1月号)に次の誤りがありました。お詫びして訂正をいたします。

P23(誤) Ms. SHOU YUAN → (正) Ms. ZHOU YUAN

P23(誤) 修士2年 → (正) 博士2年

後記(誤) 曹其氏 → (正) 曹其鏞氏

アジアの友 2015年 2・3月号

2015年2月20日発行（通刊第513号）

年間購読（送料共）3,000円（学生2,000円） 1部 500円（税込）

発行人 小木曾 友

編集 アジアの友編集部

発行所 公益財団法人 アジア学生文化協会

東京都文京区本駒込2-12-13 (☎113-8642)

電話番号：03-3946-4121

ファクシミリ：03-3946-7599

振替口座：00150-0-56754

E-mail: tomo@abk.or.jp

ホームページ：(http://www.abk.or.jp/)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN

☎+81-3-3946-4121 ☎+81-3-3946-7599

Email: tomo@abk.or.jp

Home Page: http://www.abk.or.jp/

「アジアの友」の購読会員（年3,000円・学生2,000）にご入会下さい。振替用紙又は電話等にて。



学校法人 ABK 学館

ABK学館日本語学校

所在地 〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-12

電話番号 +81-3-6912-0756

FAX +81-3-6912-0757

URL <http://abk.ac.jp>

E-mail info@abk.ac.jp



**ABK
COLLEGE**

2013年4月に完成した新校舎

新築3階建校舎。最新の耐震設計です。

- 留学生の絆が作る日本語学校 -

ABK学館日本語学校（英語名称：ABK COLLEGE）は1957年に設立された公益財団法人アジア学生文化協会が寮生活や日本語を学習した留学生、そして多くの関係者のご寄付と献身的な協力により、学校法人による日本語学校として2014年4月に開校しました。当校には姉妹校のABK日本語コース（公益財団法人アジア学生文化協会）もあり各種協力を行います。



授業風景イメージ



寮の一例



ABK日本語コース

ABK COLLEGE

ABK COLLEGE (学校法人ABK学館ABK学館日本語学校)			
東京都認可日本語課程(大学院・専門学校・就職・文化体験等)			
	4月入学 1年コース	10月入学 1年半コース	4月入学 2年コース
授業時間	860時間	1,290時間	1,720時間
入学検定料	20,000円		
入学金	80,000円		
授業料 (施設・教材費含む)	620,000円	930,000円	1,240,000円
姉妹校 ABK日本語コース(公益財団法人アジア学生文化協会)			
文部科学省指定大学進学準備教育課程			
	4月入学 1年コース	10月入学 1.5年コース	
授業時間	1,086時間	1,586時間	
入学検定料	20,000円		
入学金	80,000円(大学進学日本語課程) 95,000円(大学進学準備課程)		
授業料 (施設・教材費含む)	720,000円	1,080,000円	
所在地: 〒113-0042 東京都文京区本駒込2-12-13			
電話: +81-3-3946-2171 FAX: +81-3-3946-7590			
URL: http://abk.or.jp			
E-mail: info@abk.or.jp			

